

# 「専門日本語教育」研究に期待するもの

深尾 百合子

(東京農工大学留学生センター)

## 1. はじめに

「専門日本語」という表現は、大阪大学における理工系留学生対象の日本語教育に関する研究協議会において使用されてきたものであるが、厳密な定義適用範囲は未だ明確になっていない。しかし、この協議会が工学部からの要望で始まったこと、国立大学の留学生の増加が社会科学系よりも理工系、農学系、医学系の分野に多かったことなどから、これまでの「専門日本語」に関する研究・報告は理工系の分野のものが多い。最近では社会科学系を扱ったものも見られるようになってきた。

また、「専門日本語教育」という表現もまだ漠然としたものであり、共通概念とはなっていない。大学の専門教員はこれを専門分野の指導の一環であるとしてとらえている人が多いようであるが、「専門日本語教育」に係わっている日本語教員は、日本語教育の延長上にあるものと理解している。本稿では、「専門日本語教育」を専門(研究活動)のための日本語教育と一応定義する。

現在のところ「専門日本語」「専門日本語教育」はともにまだ漠然とした概念であるため、この分野に関する研究も目的、アプローチの方法は様々であり、明確な展望がひらけている状態とは言えない。本稿では、これまで筆者の目に触れた「専門日本語」及び「専門日本語教育」研究の概要を紹介し、これからの研究に期待するところを述べてみたい。

## 2. これまでの「専門日本語教育」研究

1983年に日本語教育学会誌『日本語教育』で「専門別の日本語教育—科学・技術系学生にどう対応するか」という特集が組まれている。これは日本の科学技術を学ぶ留学生の増大に伴って需要が高まってきたJSP (Japanese for Specific Purposes)、特に理工系の留学生に対する日本語教育が問題となってきたから

である。この特集では理工系の留学生および技術研修生に対する日本語教育の現状、理工系専門教員(通常は日本人学生を対象としている)が外国人学習者に基礎科学を指導した際に体験した日本語教育上の問題などが報告されている。それ以外に学習者(中国人)の聴解能力が低いこと、カタカナ専門用語が特に困難であること、専門用語の辞書作成が急務であることなどが指摘されている。

専門日本語教育の実践、教材開発はこの特集以前から国内外で行われていたと思われるが、その歴史は明らかではない。この分野に関するものは『日本語教育』以外に、様々な日本語教育機関で出されている紀要、文部省等の助成金研究報告書などで発表されているものも多く、この分野の研究・報告の全体像をつかむのは難しい。

専門日本語教育が日本語教育の1つの分野として意識されるようになってきたのはここ10～15年であると思われる。この間の研究・報告で入手できたものを分類するとほぼ次の3つに大別できる。1つ目は語彙等の調査・分類、文章・談話構造等の分析。2つ目は教育方法・教材の開発、3つ目はカリキュラム報告である。

1つ目の語彙等については、科学技術日本語教育で対象とすべき外来語(カタカナ語)と一般日本語教育における外来語との比較調査<sup>1)</sup>、経済学分野での漢字使用頻度調査<sup>2)</sup>、電子工学分野の文献に出現する漢字熟語の品詞と用法の頻度調査<sup>3)</sup>、農学系学術雑誌に使用された語彙の品詞別使用頻度調査<sup>4)</sup>、経済の基本的な専門語の特定および分類<sup>5)</sup>、文科系と理工系の講義で使用された副詞・形容詞の比較分析<sup>6)</sup>などがある。これらの研究は、専門分野に直接つながる効率的な語彙教育を考える際、重要な基礎データとなるものである。また、文章・談話構造については、講義およびセ

ミナーなど発話記録を分析したものとして、理科系と文科系の講義の比較分析<sup>7)</sup>、理工系大学院セミナーでの対話理解過程の分析<sup>8)</sup>などがある。仁科<sup>9)</sup>はセミナーでの日本人教員と留学生の対話の中で起こったブレークダウンに焦点をあて、日本語能力別に分析結果を出し、それに対応するための日本語教育で可能な指導法を具体的に提案している。その他、専門分野の表現・文章の分析には、科学技術文の中に多く現れる連体修飾節の持つ形態・機能を分析することによって、科学技術文の読解ストラテジーを探る試み<sup>9)</sup>、工学系学術論文に現れる「と考えられる」の機能と意味を分析したもの<sup>10)</sup>、史学論文の序論部分を筆者のコミュニケーション上の意図の観点から分析したもの<sup>11)</sup>などがある。

2つ目の教育方法・教材の開発については、経済専門用語の語彙指導法の提案<sup>12)</sup>、専門書読解能力を養成する指導の実践報告および教材開発<sup>13)</sup>、専門読解を支援するコンピュータシステム開発<sup>14)</sup>、論文作成をめざす作文指導の試み<sup>15)</sup>、専門につながる日本語教育プログラムの提案<sup>16)</sup>などがある。チームティーチングの実践報告<sup>17)</sup>では、専門日本語教育における専門教員と日本語教師の協同指導は高い効果をあげると評価されているが、指導上の視点の違い<sup>18)</sup>や役割分担、協同指導体制の確立・維持など解決すべき問題が多いことが指摘されている。

3つ目のカリキュラムについては、MIT（米国マサチューセッツ工科大学）における科学技術者のための上級日本語集中講座<sup>19)</sup>、筑波大学における科学・技術者のための日本語教育<sup>20)</sup>、中国西安交通大学の科学技術日本語専門課程<sup>21)</sup>、金沢工業大学における科学技術基礎日本語短期プログラム<sup>22)</sup>などの報告がある。

以上にあげたものは、限られた日本語教育関係誌に掲載されたものにすぎない。他に日本語教育学会の口頭発表にも専門日本語の指導実践、教材の開発などの報告が見られる。また、理工系の専門誌にも留学生の日本語指導および専門日本語の問題点を指摘した文章も散見される。これらを『専門日本語教育研究』で資料として集積できれば、この分野の確立・発展がより確実なものとなるであろう。

### 3. これからの研究に期待するもの

#### 3-1 留学生のための日本語教育研究

語彙（表現・漢字等を含む）については、どのような語彙がどの程度の範囲内の分野で共通基礎専門語彙であるかを明らかにするために、さらに多くの専門分野で分析する必要がある。このようなデータが蓄積されれば、初級から専門日本語を意識した教材の開発が可能となる。また、同じ指導法を用いて、専門基礎語彙・表現の研究結果に基づいて作成された新しい教材を使用した場合と一般日本語教材を使用した場合を比較評価することによって、教材の差異が学習におよぼした効果を明らかにすることができるであろう。

専門分野で日本語の文章を書く必要性を感じている留学生も多いが、現在は書く場合に参考となるいい辞書が見当たらない。例えば、留学生の作文には1文の中の語彙のレベル（話し言葉と書き言葉）が統一されていないものがよく見られる。また、助詞の間違ひも多いが、調べる手だてがなく、専門教員の添削などから情報を得て1つ1つ覚えていくしかないのが現状である。専門分野でよく使われる動詞、助詞相当語句、接続詞、副詞、形容詞等、基礎学術用語の用法辞典の開発が待たれる。この開発の基礎となる語彙、表現、文型の分析およびデータの蓄積を多くの専門分野について行う必要がある。留学生の作文には以上のような1文レベルの問題とともに文と文の結束性、談話構成などの問題も多く見られる。専門の分野、特に理工系では事実と評価・判断の記述が大部分を占め、その違いを明確にすることが要求される。従来の日本語教育で使用されてきた作文教材にはこのような期待に応えられるものがいまのところ少ない。

作文教材を作成する際には、論文やレポートその他の学術的な文章の分析が必要となる。この分析は作文の指導ばかりでなく読解の指導にも有用であると思われる。

聴解能力は専門の講義・セミナーを理解する際の最も重要な技能である。留学生は聴解の対象の中で講義が最もむずかしいと言う。それは専門用語の不足による場合も多いが、長い独話を聞き取る能力が低いことも大きく影響していると思われる。専門の講義の聞き取りを日本語教育として指導するためには様々な分野の講義の分析が必要となる。専門語彙、表現、文型な

どの分析に留まらず、1回の講義の中にどのような談話の単位がみられるか、ある談話と他の談話がどのように関係し、どのように進んでいくかといったような分析が必要である。この分析から日本語教育で言語技能指導として扱える部分と専門分野の教員でなければ指導できない部分が明らかになってくる可能性もある。その過程で、専門を超えた講義聴解能力を養成するためにはどのような教材・指導法が有効であるかということに関しても示唆が得られると期待される。

会話については「セミナーや学会等での発表は準備ができるが、質疑応答に困る」といった声が留学生、指導教員双方から聞かれる。その理由の1つはフォーマルな会話ができないということである。これは専門の分野に限られたものではないが、研究活動を行う上で重要な言語能力であろう。専門の話題でフォーマリティの違いを指導あるいは自習できる教材が期待されている。

専門日本語教育の研究は始まったばかりである。今後、日本語教員による専門日本語指導、専門教員との協同指導、専門教員による専門指導の一部としての日本語指導の試みが広い範囲で行われ、その成果が本誌で報告されることを期待したい。

### 3-2 専門日本語の理想像の追及

留学生を対象とした専門日本語教育の目標は、母語話者である日本人のレベルである。しかし、到達目標である日本人の日本語使用能力が問題視されている。理工系の分野では卒論、学位論文の添削およびプレゼンテーションの指導が研究室単位で行われるのが慣習となっている。この指導の様子（発表練習）をビデオで録画し調査した結果によれば、扱われている中身は研究室によって違うが、行われている指導はほとんどが日本語の使用技術の指導である。しかし、現在のところ専門教員の個人的な経験に基づいた指導がなされており、情報伝達手段としてどのような日本語を理想的なものとするかは教員によって様々である。個々の専門教員が持っている指導技術を集約し、分析することで、研究結果を伝達する「明解な専門日本語」のイメージおよび指導法が見えてくる可能性がある。これまではこのような専門日本語の理想像及び日本語の使

用技術の指導について、違う分野の専門教員あるいは専門教員と日本語教員が議論する場がなかったと言える。留学生に対する専門日本語の指導の問題ばかりではなく、現在、専門教員が問題と感じている日本人学生の書く技術、プレゼンテーションなどの話す技術の問題点の分析、それに対する効果的な教材・指導法についての議論をはじめとして、講義・セミナーでの教員側（教える側）の話す技術に至るまで、専門分野におけるあらゆる日本語の使用技術に関する議論が本誌で展開されることを望むものである。

### 参考文献

- 1) 羽田野洋子：科学技術日本語教育と外来語，日本語教育，74号，pp.73~85（1991）
- 2) 志柿光浩：経済学専攻の非漢字系学習者にはどんな漢字を教えればよいか—経済学文献を対象とした漢字使用頻度調査の結果と分析—，日本語教育，76号，pp.67~87（1992）
- 3) 加納千恵子：科学技術文献に出現する漢字熟語に関する一考察，筑波大学留学生センター日本語教育論集，11号（1996）
- 4) 村岡貴子・柳智博：農学系学術雑誌の語彙調査—専門分野別日本語教育の観点から—，日本語教育，85号，pp.80~89（1995）  
村岡貴子・影廣陽子・柳智博：農学系8学術雑誌における日本語論文の語彙調査—農学系日本語論文の読解および執筆のための日本語語彙指導を目指して—，日本語教育，95号，pp.61~72（1997）
- 5) 小宮千鶴子：専門日本語教育の専門語—経済学の基本的な専門語の特定をめざして—，日本語教育，86号，pp.81~92
- 6) 十島真理・金久保紀子：大学講義で使用されている副詞・形容詞の特徴，筑波大学留学生センター日本語教育論集，11号（1996）
- 7) 金久保紀子・金仁和・本田明子・松崎寛：講義の日本語における理科学・文科学の特徴，日本語教育，pp.74~90（1993）
- 8) 仁科喜久子・笹川洋子・土井みつる・五味政信・楠本はるみ：理工系留学生のセミナーでの対話理解過程の分析—理工系学生のシラバス作成に向け

- て一, 日本語教育, 84号, pp.40~52 (1994)
- 9)市川保子: 科学技術文書における連体修飾節の意味・機能, 筑波大学留学生センター日本語教育論集, 9号 (1994)
- 10)佐藤勢紀子・仁科浩美: 工学系論文にみる「と考えられる」の機能, 日本語教育, 93号, pp.61~71 (1997)
- 11)杉田くに子: 上級日本語教育のための文章構造の分析—社会人文科学系研究論文の序論—, 日本語教育, 95号 pp.49~60 (1997)
- 12)岡益巳: 経済学部留学生のための経済用語の指導について, 日本語教育, 82号, pp.23~33 (1994)
- 13)石井恵理子: 専門書読解の導入, 筑波大学留学生センター日本語教育論集, 3号 (1987)
- 深尾百合子: 工学系の専門読解教育における日本語教育の役割, 日本語教育, 82号, pp.1~12 (1994)
- Shinzato Rumiko: Intermediate Reading Materials in Technical and Scientific Japanese, 世界の日本語教育 (日本語教育事情報告編), Vol.4, pp.119~138 (1996)
- 深澤のぞみ: 理工系留学生を対象にした「読む本番」を意識した読解教材開発について, 日本語教育, 92号, pp.25~35 (1997)
- 14)深田淳: 専門日本語読解教育の方法—読解支援システムの設計と開発—, 日本語教育, 82号, pp.13~22 (1994)
- 15)佐藤勢紀子: 論文作成をめざす作文指導—目的に応じた教材の利用法—, 日本語教育, 79号 pp.137~147 (1993)
- 16)横田淳子: 専門教育とのつながりを重視する上級日本語教育の方法, 日本語教育, 71号, pp.120~133 (1990)
- 17)中村重徳: 専門教官と日本語教官との協働による社会科学系留学生のための上級日本語教育—一橋大学に於ける実践報告—, 日本語教育, 74号, pp.172~185 (1991)
- 山本一枝: 科学技術者のための専門読解指導—チームティーチングによるMIT夏期集中日本語講座—, 日本語教育, 86号, pp.190~203 (1995)
- 五味政信: 専門日本語教育におけるチームティーチング—科学技術日本語教育での日本語教員と専門科目教員による協同の試み—, 日本語教育, 89号, pp.1~12 (1996)
- 18)深澤のぞみ: 科学技術論文作成を目指した作文指導—専門教員と日本語教師の視点の違いを中心に—, 日本語教育, 84号, pp.27~39 (1994)
- 19)筒井通雄: MITにおける科学技術者のための上級日本語集中講座, 日本語教育, 68号 pp.216~227 (1989)
- 20)田上由紀子: 科学・技術者のための日本語教育—あるカリキュラム—, 世界の日本語教育, 2号, pp.95~106 (1992)
- 21)河路由佳: 中国・西安交通大学の科学技術日本語専門課程—その沿革とカリキュラム—, 日本語教育, 82号, pp.147~157 (1994)
- 22)札幌野寛子: 日本人学生との交流を通して学ぶ科学技術基礎日本語短期プログラム—金沢工業大学夏季日本語プログラム (KIT-SPJ) —, 世界の日本語教育 (日本語教育事情報告編), Vol.4, pp.153~172 (1996)